

平成 29 年 5 月発行

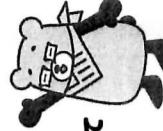
Happy 活動編 荒尾市立荒尾第四中学校

荒尾市立荒尾第四中の生徒は熊本日日新聞の「読者ひろば」へ投稿を続けています。平成 28 年度、同校に赴任した村岡英治教頭先生の発案。現在まで、数多くの生徒の意見や主張が投稿されています。

「話したいこと・伝えたいことなどを素直に表現できる場をつくってあげたかった」と話す村岡教頭。そのために、同校教諭は皆、生徒たちが訴える姿を見逃さないそです。「読者ひろば」への投稿が採用されると全校集会で紹介。生徒自らがパブリックスピーチング（演説・スピーチ全般）話し言葉をそのままスピーチする方法）することで、全生徒の『聞く・受け入れる』姿勢につながっています。今では多くの生徒に、主体的かつ積極的な言動が見られるそうです。『立志式の誓い、誰にも優しく』という題名で投稿をした 3 年

の荒巻優さんは、「自分自身の経験をどのように書けば読む人にうまく伝えるのかを考えながら文章にしました。多くの方に読んでもらい反響があつたことで今後の励みになりました。これからも相手の立場になって考え、行動できる人を目指したい」と笑顔で話してくれました。四中の生徒たちは、相手意識や仲間意識も強くなり、お互いを理解し合うことができました。これからも地域の方へ、保護者はもちろん、地域の方へ、この活動で保護者だけでなく、人間に成長しているようです。

村岡教頭は、「この活動をかけていただくようになります。まずは未来のグローバル社会を生き抜いていかなくてはなりません。また、将来の原動力につながってもらえればと考えてあります」と、先生自らが相手（生徒）の立場になつて、先生を見据えていました。皆さん、読者ひろばの投稿を今後も楽しみにしてください。（蕨本）



「読者ひろば」へはどなたでも投稿可能です。皆さんも思いや感じたことを投稿してみてください。たくさんの投稿をお待ちしています。

被災地を思い、毎日を大切にい 前田紗英 14 中学生
4月16日、1年前のその日は誰もが懸念ない緊
張感が漂った。まだ地
震から思つたまま、学校で離れて暮らしてい
た私の家族は6人で、うち4人が亡くなっ
た。私は震災で母と車で通つた。少し前に父
の車を運転してそれ仕事場や父の家へと
向かうと、まだいろんなかたちで運んでいた
車の残骸は当たり前に暮らしあつた。
でもまだ自分の家の前で、毎日何が起つてそ
れぞれの進展が解かるかわしいけれど、
まだいろんながいふは思つてこなかつた。私は震災
の前で、みんなが運んでいた。私は震災
に運び出され、まだどうしていいかわから
ない。だからこそ、自分が何をするか好
きになつた。だからこそ、自分自身の家
に向かって一日一日を大切に生きたい。
（前田紗英さん）

平成 29 年 5 月 14 日に掲載された前田紗英さんの投稿（熊本日日新聞から）